

# 序

著者	久野 昭
雑誌名	日本人の他界観
巻	3
ページ	1-6
発行年	1994-03-31
その他のタイトル	Introduction
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00005778">http://doi.org/10.15055/00005778</a>

## 共同研究

### 「日本人の他界観」

## 序

久野 昭

国際日本文化研究センターの共同研究「日本人の他界観」が発足したのは、一九八八年の夏であった。私が研究代  
表者として最初の問題提起を行ったのが、同年七月二十七日。以後、幾回もの研究会を重ねて、いま予定された終了の  
時期を迎えようとしている。

ここで「他界」とは、その名詞的な意味においては、「あの世」と言い換えてもいい。「あの世」について日本人が  
語るとき、その「あの」という言いかたには二重の意味がある。

ひとつは、「この」に対する「あの」であって、現に「この」世に生きている話し手からも聞き手からも離れたと  
ころを示す。もし生と死とを決定的に隔てる川を表象するならば、この世は此岸であり、あの世は彼岸である。

もうひとつは、今更あらためて「どの」と聞き返すまでもなく、その話し手にも聞き手にも、同じものを表象して  
いることが分かっている、そういう意味での「あの」である。つまり、「あの世」はたしかに現世から遠く離れては  
いるが、実は現世に生きている者にも馴染みのある、その限りでは現世に近い「あの」世であった。

一方では生者と死者が決定的に隔てられていながら、他方ではその隔てられた世界とその世界に住む者は、生者に

とつても無縁ではありえなかった。それは生きている者にも身近な世界であり、親しみを持ちつづけることのできる存在でもあった。「この」世から「あの」世への送迎、「この」世に「あの」世との往還の道の開かれていることを示す習俗は、馴染みのあるものとして、いままも生きています。そのような日本人の「あの世」の性格は、これを「他界」と言い換えても失われるものではない。

しかし、「他界」には、後に触れるように、「あの世」にはない意味、死ぬことそれ自体を示す動詞的な意味も含まれている。私たちが日本人の「あの世」観よりは「他界」観を主題として選んだ理由のひとつに、その動詞的な意味をも生かそうという意図があったが、また、すでに「あの世」を指す学術的な用語として「他界」という言葉が定着しているとの認識もあった。たとえば京都大学東南アジア研究センターから、棚瀬襄爾の『他界観念の原始形態——オセアニアを中心として』が公刊されたのは一九六六年であり、ここでは「他界」の定義は下されていないものの、「他界」観念に関する諸学説を概観しているその序論からも明らかのように、「あの世」に相当する文化人類学的用語として、「他界」が用いられている。

さて、「日本人の他界観」というような、地域的にも歴史的にもかなりの変移の予想される、しかも日本人のものの考えかた、さらには思想そのものにかかわってくる問題、さらには研究者それぞれの立場によっても、おそらく受け止めかたを異にするであろうような問題について、どこまで纏まりのある共同研究が可能かという疑問が、必ずしも私たちになかったわけではない。しかし、同時に、日本人が他界について抱いてきた観念、あるいは想念を軸にして、日本人のものの考えかたを明らかにしたいという関心と、そのために共同研究を行うことの必要とが、研究者それぞれが現に他界をどう捉えているかとは別の事柄として、この共同研究を組織し推進する強い動機になっていたことも、事実なのである。

他界観の地域的な変移の無視できないことは、たとえば北海道や沖縄における事例を思い浮かべただけでも、明らかであろう。ただし、その変移は決して日本人の他界観という枠組みを突破するようなものではない。たとい大部分の日本人には異質なものであるかのように見えても、実は記憶が薄れただけであって、むしろ自分たちの方が同じ発想の糸を手繰りながら、たとえば外来の思想の影響などによって、他界観を変移させてきたのではないか。とすれば、それは日本人にとって異質なものであるよりは、むしろ日本人にとっての他界の原像を伝えていることになる。う。他界観が歴史的に変移してきたこともまた、到底無視できぬ事実には違いない。日本人の他界観を問題にするとき、それがどの時代の観念であるかは、その時代に支配的であった宗教とのかかわりからも、つねに念頭に置くべきだろう。そのことは、明らかに、日本人の思想の重層性とよぶべきものにも関連する。日本思想史は外来の思想、とりわけ宗教的思想の受容と変容との過程によって層を形成してきたし、その層の目盛りとなるのは時代区分だからである。ただし、この層はあくまでも日本人の思想の層である。その層を表面から削っていったら最後に到達した層のみを日本人の伝統的な思想の層と見るたぐいの発想は、日本の文化的な、とりわけ思想的な伝統に対する認識不足も甚だしい。というのも、日本列島の地理上の位置から見ても、日本の文化的伝統が海外の文化の影響とは無縁に形成されたはずはないし、そもそも文化や思想の伝統が生きたものである限り、変革を契機として含んでこそその伝統であり、変革なき伝統などというものは、実は伝統ではなくて、因習にすぎないからである。あの長期にわたる鎖国という政治的実験の期間においても、そうであった。

しかも、日本人が受容し変容した外来の文化や思想は、一方で、もはや海外の文化や思想ではないが、また他方で、それゆえにこそ、かえって一層の普遍性を獲得しえたのではないか。たとえば、日本に根付いた仏教は、もはやインド仏教でも中国仏教でもない。だが、それはやはり仏教であり、仏教は日本仏教に変容することで、かえって一層の

普遍性を得たはずなのである。はじめから普遍的な文化や思想はありえない。それは地域的、歴史的な特殊をかいくぐってのみ、特殊において生かされることによってのみ、はじめて、より大きな普遍性を獲得しうるのではないか。

日本人の他界観も、当然、外来の宗教的思想から隔離されたものではありえず、たとえば道教、仏教、儒教などの影響を受けながら、日本なりの他界観が形成されてきたはずである。そういう変移を含んだ形での他界観であり、そういう形での他界観になお、日本人の伝統的なものの考えかたの反映を認めることができるはずなのである。

さて、その他界ということだが、この言葉はたしかに、たとえば死霊の棲む穢れた世界と信仰の篤い者の魂の赴くべき清浄な世界とを問わず、死後の世界、来世の意味で用いられるのが普通である。しかし、この言葉の用法はそれだけではない。死ぬこと自体も、他界という言葉で表現される。「此ノ生「シヨウ」ハ徒「イタヅラ」ニ過テ、他界「ホカノサカヒ」ニ趣カム事、近キニ有リ」(『今昔物語』卷第十三・第十九)と言われる場合の他界は空間軸で捉えられているが、「他界、タカイ、死去義也」と文明本『節用集』に記載される他界は時間軸で捉えられている。「もしこの龍王他界に移らば、池淺く水少なくして、國荒れ水乏しからん」(『太平記』卷第十二)の他界は空間的だが、「義經身體髮膚を父母にうけ、いくばく時節を經ず、故頭の殿御他界ののち、みなしごとになって、母のふところに抱かれ」と義経が腰越状に書く(『平家物語』第百十四句腰越) 他界は死ぬことの意である。

この死ぬという意味での他界の用例(『吾妻鏡』『海道記』等)は、どうやら武家社会の成立後のようだが、鎌倉時代になって、武家社会において、「往生」を言う代わりに「他界」が動詞として用いられるようになった理由はともかく、今日の用語法はこの意味での用法をも含んでいる。とするなら、日本人の他界観を問題にする場合も、空間的に発想される他界のみでなく、死ぬということをも日本人がどう受け止めてきたかをもまた、視野に入れるべきであろう。

その上で、私たちは、共同研究者によるおそらく多面にわたるであろう考察を整理するための目安として、二つの領域を設定した。ひとつは、日本人の抱く他界の表象・観念を扱う領域であって、たとえば他界の図像ないしは構造、他界における救済、臨終体験などが、その背景をなす宗教的想念との関連において、この領域での問題になるだろう。もうひとつは、日本人による他界への送迎・往還を扱う領域であって、たとえば神話における他界、葬送儀礼や祖霊信仰にかかわる儀礼と他界、現世と他界との境界といったような問題が、この領域で考えられる。むしろ、これは一応の目安であって、ふたつの領域の問題は互いに深く絡み合うはずであり、さらに靈魂観、死生観などから切り離して論じられるような問題でもない。いずれにせよ、かなり整理しにくいことの予想される研究領域なのである。

それにもかかわらず、「日本人の他界観」を主題とする共同研究を続けてきたのは、私たちの国の文化的伝統に、たとえば光合成によって無機物から有機物をつくりながら生きていく緑なす樹木と同様の、すぐれた自己増殖ぶりを想定しうるからである。日本の文化史は、すでに述べたように、海外文化の受容とその日本の変容の歴史でもあったが、海外から入ってきたものは、祭器、技術、思想を問わず、それが舶来しただけでは、この国の文化にとつては、ただ珍しいだけの無機物にすぎまい。それがこの日本という精神風土で文化的に受け止められて有機的に作用するためには、ちょうど緑色植物が光合成によって大気中の二酸化炭素を分解して有機化するように、海外から受容したものを一旦分解した上で有機化し、日本的な酸素を発散するという手続きが必要だったであろう。

幹の中心をなす髓の周囲にほぼ円状の層を形成していくのが、樹木の生長過程である。師部と木部との境の形成層は分裂組織であり、季節による寒暖の差の大きい日本では、春から夏の終わりにかけての時期、形成層の分裂活動が見られ、この活動ゆえに樹木が成長し肥大する。秋から冬は休止期間だが、この休止期間あってこそ年輪が見えるのである。その年輪は髓を中心にはするが、その幅は一樣とは限らない。陽の光との関係もあれば、季節による風の向

きということもある。幹から張り出した枝や斜めに上方を目指した幹の場合、とりわけ不均等が目立つ。

同じことが日本の文化についても言えないであろうか。たとえば西日本と東日本、太平洋側と日本海側、文化的な陽当たりの良し悪し、朝鮮半島や中国大陸との交通の便、その他、さまざまな地域差が不均等を生んだ。それでも、日本文化という一本の樹木を、私たちは表象している。この樹木にも生長期間があり、生長休止期間もあって、むろん一年単位でなく、はるか長期にわたる層だが、年輪を形成しつつ、自己増殖を続けてきた。その生長輪は、日本文化という樹木の横断面に顕れる。

ただし、私たちは、この樹木の外に立っているのではない。樹木の内側に身を置きながら、しかも、どこかでその断面を見ることなしに、私たちはこの樹木を知ることにはできない。そういう作業を、私たちは重ねてきた。他界観を手掛かりとして試みてきたこの困難な作業に、いま一応の区切りをつけ、その成果を公にするのも、現に自己増殖を続けているはずのこの日本の文化的伝統への私たちの内面的なかかわりを、ここで確認しておきたいからに他ならない。